夫婦の年季

丹羽綾子

夫婦の年季

丹羽綾子

海竜社

<著者紹介>
丹羽綾子（にわ　あやこ）
明治44年，東京浅草に生まれる。
昭和10年，作家丹羽文雄氏と結婚，一男一女をもうけ，
現在は，孫4人にも恵まれている。
家庭料理を得意とし，『丹羽家のおもてなし家庭料理』
（講談社）の著書がある。

夫婦の年季　　定価　一、一〇〇円

昭和六十年九月七日　第一刷発行

著　者　丹羽綾子

発行者　下村のぶ子
発行所　株式会社　海竜社
東京都中央区築地二ノ九ノ二（郵便番号）一〇四
電話　東京（〇三）五四二一―九六七一　振替　東京一―四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所　白陽舎印刷工業株式会社（㊐）
製本所　大口製本印刷株式会社

© 1985, Ayako Niwa, Printed in Japan

ISBN4―7593―0130―5 C0095　¥1100E

目次

夫婦の年季

夫婦の年季

お顧客一人の愛情床屋――8
夫の椅子・妻の椅子――12
出発は六畳一間のアパート――17
夫の役割妻の役割――23
もの書く人に嫁いだからには……――27
「おい、題を考えろ」――32
夫の〝面会日〟は私のときめきの日――35
主の帰らぬ夜は……――39

老いを愉しむ

まだ年をとっていない――44
現役の幸せ――49
晩酌ごっこ――55
五十年、昼寝知らず――60
俳句の愉しみ書の夢――64

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

山の奥の〝ミツコ〟――71
年とともにおしゃれの華やぎ――75

祖母の女大学

祖母の贈りもの――80
ないしょのダンス狂――85
お客好きは祖母譲り――89
人魚にさわってきたイワシ――94
おばあちゃん子は三文の得――98

ひとの喜びは私の喜び

私の宗派は感謝教――102
もっと大切にしてあげたかった――106
青い目の嫁ベアテ――110
わたしのボーイフレンド――116
友はよきかな――120

わたし流プレゼント――124
ワリカン、いいですね――128
楽観的人づき合いの心得――132
綾子の人事相談所――138

台所はわたしの領分

ままごとの延長なりと瓜刻む――144
漬けものの四季――148
煮物の年季――152
なければないで知恵は湧く――156
アルマイトの鍋二十年、おろし金五十年――160

丹羽家の食卓

丹羽家の正月料理――164
わが家の健康常備菜――168
私の発明料理――173

味覚は育ちの味——177
休胃日の献立——181

魔法の秘密は冷蔵庫

お得意ちらしずし——188
私流、簡単料理アイデア料理——193
秘密は冷蔵庫の中の〝素〟——197
台所に捨てるものなし——201

娘に伝える味の年季

ご自慢おふくろの味——206
〝玉ねぎのリング揚げ〟できますか？——210
舌先三寸味の勘——213
女三代、台所繁盛記——216
あとがき——220

ブックデザイン――田中淑恵
装画・紙版画――井上員男

夫婦の年季

お顧客一人の愛情床屋

キャリア四十年の素人床屋

「おい、頭刈ってくれ」

二階の書斎から降りてきた主人が、突然、申します。あらあら、仕事の一段落でしょうか、それとも閑かな春の陽ざしに誘われてでしょうか、ご気分次第の注文です。

「あなたはいいわね。床屋さんがおかかえで。天皇陛下だって、そうすぐってわけにはいかないのよ」

などと言いながら、私は早速、散髪の支度を始めます。私の皮肉など耳をかさず、主人は黙って日当たりのいい居間の椅子に坐ります。

主人の頭を初めて刈ったのは、あれは、戦争中の疎開時代でした。四十年以上も前のことです。疎開した村は栃木の山奥で電灯もなく、床屋さんといったらみるからに不潔です。黴菌でもついて変な皮膚病になったら大変だからと、私はバリカンと鋏を東京で買いとと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

のえて持って行きました。

「床屋さんの真似くらい、あたしだってできるわ」と、若気の至りの上に心臓の強い私のこと、簡単に考えて鋏をにぎりました。ところが、さて、やってみますとこれが惨憺(さんたん)たる大トラです。ジョキン、ジョキンと切った跡がそのまま残り、段々刈りとなってしまいました。無残な作品？　を前にして、私は言ったものです。

「こんな山奥ですもの、お客さまも見えないし、あなた、一週間も我慢したら直るわよ」

なんとまあ、乱暴な床屋でしたこと。主人がそれまで行きつけにしていたのは銀座の「ヤング軒」。いまでいう〝有名人〟が行くことで知られていた高級理髪店でした。主人はそれだけお洒落な人なのですが、戦時下であってみればやむを得ないと考えたのでしょう。さして文句も言わず、諦めのいいことでした。

それにしても、なんとかもう少し上手に刈りたいものです。といっても、参考にする本とてない時代。私は、村の床屋さんの前を通るたびに、ガラス戸の中を覗き込むようになりました。そして、「ああ、あんなふうに手を動かすのだな」と納得しては、早速、真似してみます。それでもうまく行きません。また失敗……。角度が悪いのかなあ、髪のぬれ具合のせいかなあ、といろいろと試してみます。これが結構おもしろいのですね。考えてみますと、私は床屋さんも料理もおなじことですべて自己流、失敗してもいっこうにこたえ

ず、あれこれと工夫をしてみるのが愉しくて、それが張りを与えてくれたように思います。

散髪は主人だけでなく、小学校一年だった長男の頭も刈りました。子供の頭は、丸刈りです。一見、簡単そうですが、バリカン使いがこれまたひと仕事。バリカンが髪の毛を挟んでしまうので、長男は、その度に「痛ーい！」とキャアキャア騒ぎ立てます。私は〝軍国の母〟よろしく、「男の子じゃないの。我慢しなさい」とたしなめます。後で聞けば、バリカンは相当の技術を要するものだそうで、子供にはかわいそうなことをしたものです。

愛情床屋も年季入り

さて、床屋さんの腕は少しずつ上がり、刈り上げもきれいにできるようになりましたが、主人が鏡を見て、「お、うまくできたな」と言うまでには七、八年の年季がいったでしょうか。何れの道もそうでしょうが、なにげなく見えても、プロというのはたいしたものだなあと思い知りました。

その栃木の山奥には一年ほどいて終戦となり、東京へ引き揚げました。世の中もなんとか落ち着いて、再び、町のあちこちに床屋さんもぼつぼつ店を開き始めましたが、主人は、以来、私に任せきりになってしまったのです。

床屋さん仕事がすっかり身についた私は、孫ができたときも、うぶ毛を鋏で切ってやり

ました。それがいちばん衛生的だと思いましたから。孫の床屋さんはそれからもずっと手がけてきましたが、年頃になるにつれて文句が多くなりました。

「おばあちゃん、そこはそんなに切っちゃ駄目。長いのが流行なんだよ」

「あ、そこはもう少し短く」

いまふうの髪型はさっぱりわかりません。

「うるさいねえ、あなたは。そんなお顧客さんはいらないわよ」

さすがに、私の腕には負えなくなり、とうとう断わってしまいました。

まあ、なんといっても、いちばんおとなしいのが〝うちのおじいちゃん〟。これだけ世の中が豊かになって、立派な理髪店がたくさんできても、でかけるのが億劫なのか、待たされるのがいやなのか、変わらぬ私のお顧客さんです。

「あなた、そっち見ちゃ駄目。ちょっと動かないで」

「おい、あんまり切るなよ。毛が薄くなっているんだから」

「毛の薄いところは隠して、これでも愛情床屋さんは大変なのよ」

主人は子供のときの怪我がもとで、後頭部に小さなハゲが残ってしまいました。これを出さないように刈るのは、ちょっと技術を要するのです。

料理も愛情料理なら床屋も愛情床屋。数えてみれば四十年間、お顧客一人の稼業です。

夫の椅子・妻の椅子

〝主人の椅子〟

夕食をすませますと、主人は、おなじ居間にある専用の椅子に移ってテレビを見るのが、ここ数年の習慣になりました。主人のくつろぎのひとときです。

食事のあと片づけをすませた私もそうしますが、どうも趣味がぴったりというわけにいきません。主人が好きなのは野球と西部劇。私は歌舞伎や舞台中継……。

「今夜は歌舞伎が見たいわ」

などと、私が言いますと、主人はさっさと自分の書斎に消えてしまいます。この居間のテレビのチャンネル権は私が持っていますので。外国の夫婦でしたら、夫が妻の肩を抱きかかえて一緒に見るのでしょうか。私たちは、およそ、そういう甘さには縁のない昔型夫婦ですけれど、五十年も連れ添いますと、空気のように通い合う安らかさがあって、各々がかかえるテレビで好きなものを見るのもまたよきかな、の感があります。

そうでした。この居間の椅子は〝主人の椅子〟なのです。主人は二階の書斎で仕事をし、私は階下の台所でおさんどんというのが標準的な日常ですが、主人は時々、気分を変えにふらりと降りてきますと、この椅子に腰をおろして庭を眺めるのが好きです。

椅子は庭に面した居間の定位置に置かれています。寒い冬はガラス戸越しに、春になるとガラス戸をいっぱいに明け放って、主人は、まるで、瞑想でもしているように庭に向かって椅子にかけています。椅子の前には、いつでもお茶が飲めるようにトレーを置いておきます。私も、時々、主人の傍らに坐って、一緒に庭を眺めます。

先日も、もうほとんど散りかけたバラを、私が「もうそろそろ切ろうかしら」と言いますと、主人に、「まだ咲いてるじゃないか。せっかちに切るなよ」とたしなめられました。そんなわけで、くたびれたようなバラも咲かせてあります。

庭はなるべく自然にしておくのが好きなのです。うっそうと茂らせた庭に遊びに来る小鳥はきじ鳩、むく鳥、尾長……もちろん雀もきますし、名前のわからないきれいな小鳥たちが、一日中、鳴き交わしています。ちょっとした自然の交響楽……。

「市役所に頼むと巣箱を置いてくれますよ」と教えられ、梅の木に巣箱を設けますと、その名前知らずのきれいな小鳥が出たり入ったり、ある日そっと覗くとちっちゃな卵があるのでした。餌台も用意してありますが、いつついばむのか、いっぱい入れておいた餌がい

つの間にかなくなっています。

冬は乙女椿や山茶花がびっしりと花をつけ、早春にはうっすらと雪をのせた紅梅のりんとした佇まいが目をひき、春の盛りには、珍しい白の山吹やバラ、沈丁花が咲き匂います。初夏に向かえば、つつじの真紅、あじさいの白と紫、そしてくちなしの香り、真夏は深い緑樹が涼しげな樹影をつくってくれます。秋の眺めは、ぼたん色の蒔絵萩、白萩、木犀、月桂樹……。一年中、何かしら花の絶えない庭は武蔵野の一隅に住む幸せを感じさせてくれます。そうそう、それらの幾つかは目を愉しませてくれるばかりでなく、私の料理の大切な素材にもなります。ふき、月桂樹の葉、体にとてもよい紅梅の実、それから、くちなしの実……くちなしの実は冷凍して、カレーなどを作るときに香辛料として用います。

無口な主人と話好きの私の庭を眺めながらのお茶飲み話は、孫のこと、子供たちのこと。これといって特別にとりたてて言うほどの話題があるわけではありませんが、それでも主人とのこのひとときは、私にとっても、心が解き放たれる安らぎの時間でもあります。そして、ときには私が昔の恨みごとを言ってみたり……。

えにしの糸に結ばれて

五十年の歳月には、実にさまざまなことがありました。本気で離婚をしようと考えたこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.